2023年1月29日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

心に晴れ着を

［ルカによる福音書7章18～35節］

ヨハネの弟子たちが、これらすべてのことについてヨハネに知らせた。そこで、ヨハネは弟子の中から二人を呼んで、主のもとに送り、こう言わせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」二人はイエスのもとに来て言った。「わたしたちは洗礼者ヨハネからの使いの者ですが、『来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか』とお尋ねするようにとのことです。」そのとき、イエスは病気や苦しみや悪霊に悩んでいる多くの人々をいやし、大勢の盲人を見えるようにしておられた。それで、二人にこうお答えになった。「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」ヨハネの使いが去ってから、イエスは群衆に向かってヨハネについて話し始められた。「あなたがたは何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。華やかな衣を着て、ぜいたくに暮らす人なら宮殿にいる。では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ、言っておく。預言者以上の者である。『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの前に道を準備させよう』と書いてあるのは、この人のことだ。言っておくが、およそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大な者はいない。しかし、神の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」民衆は皆ヨハネの教えを聞き、徴税人さえもその洗礼を受け、神の正しさを認めた。しかし、ファリサイ派の人々や律法の専門家たちは、彼から洗礼を受けないで、自分に対する神の御心を拒んだ。「では、今の時代の人たちは何にたとえたらよいか。彼らは何に似ているか。広場に座って、互いに呼びかけ、こう言っている子供たちに似ている。『笛を吹いたのに、踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、泣いてくれなかった。』洗礼者ヨハネが来て、パンも食べずぶどう酒も飲まずにいると、あなたがたは、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、それに従うすべての人によって証明される。」

[１] 偉大な求道者・バプテスマのヨハネ

「バプテスマのヨハネ」という人物について、私は少し過小評価している所があるのかもしれないなと今日の箇所を読んで思いました。「バプテスマのヨハネ」。私はまだこの人の存在についてはよく分かってはいません。少し謎めいた人物のように思えます。ただ、主イエス様はこのヨハネをとても高く評価していると思います。旧約聖書には優れた預言者が色々登場していますが、イエス様は、バプテスマのヨハネのことを「預言者以上の者」だと言っていますし、更には「およそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大な者はいない」（26、28節）という言葉さえ語っています。そして、イエス様自身、このヨハネからバプテスマ（洗礼）を受けています。それは或る言い方をすると、ヨハネの信仰を神様の御心にかなったものとして信頼し、彼の働きを敬っているということだと思います。ヨハネと主イエス様は人間的には親類同士になりますけれども、そのような血のつながりというのではなく、夫々が神様からの使命に生きている、その距離感もあるのです。変にベッタリしていません。ですから、今日の箇所で、投獄されているヨハネは自分の使者をイエス様に遣わして、「来たるべき方はあなたなのでしょうか？それともほかの方を待たなければなりませんか」（20節）と問わせています。言ってみれば、ヨハネはメシア・救い主ではないことを自覚しています。むしろ、メシアの到来を真剣に待っている、一人の偉大な求道者です。そしてこの問いこそ、歴史上最も重要な問いであるのかもしれません。

［2］ ヨハネのメッセージとその先

このヨハネの問いは、私たちはまだ待たねばなりませんか？神様の救いは本当にやって来るのでしょうか？旧約以来、私たちはメシアを待ち続けました。それはあなたなのですか？というものです。その問いの背後には、ユダヤを解放する政治的な意味合いもあったのかもしれませんが、イエス様は政治的なことは一切語らず、このように仰いました。22節以下。「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。」―これは素晴らしい言葉です。イエス様は、事実だけを語っていますよね。わたしを通して何が起こっているのか。それはイザヤが預言していたようなこと（35、42章）を、あなた方は見たでしょう、体験したでしょう。それこそが答えだ。神の国が、私を通してやって来ているのだ。それを虚心に驚きを持って受け入れることが出来る人は幸いである、と仰っているのです。主は信心の「強制」は致しません。カルトならいざ知らず、信仰とは自らが神様に心を開くこと（それも神様のわざですが）から始まるからです。キリスト教信仰の要は、文字通りイエスです。「わたしに（イエスに）つまづかない人は幸いである」。

私たちは「イエス様のような良い方につまづくなんてことはありません」と思うかもしれませんね。しかし、私たちはイエス様につまづくことも、ある意味当然なのかもしれないと思います。考えてみれば、イエス様の弟子たちも皆イエス様につまづいたのです。多くの人にとって一体何がつまづきの種だったのでしょうか？政治的なメシアを期待していたから失望したのでしょうか？それもあると思います。しかし、他にもあると思います。私は思うのですが、それはイエス様がいわゆる「宗教家」らしくなかったからだと思います。その意味では対照的なのがバプテスマのヨハネなのかもしれません。ヨハネは、神様の裁きを強調し、それゆえ神様に立ち帰る悔い改めを激しい口調で語りました。‟荒野に叫ぶ声”でした。ユダヤ人たちに対しても容赦なく「自分たちの先祖がアブラハムなどと思ってもみるな。斧はすぐ木の根元に置かれている」と、すべてを見抜かれている神様の前に、あなたの心の姿勢を真っ直ぐにせよ、という厳しいメッセージを語ったのです。当時は預言者も廃れていた時代であったので、このヨハネの熱量の籠った真剣なメッセージは人々の心に刺さったのだと思います。そして、続々とヨルダン川で彼からバプテスマを受けたのです。このバプテスマは新生のしるしと言うよりも、自分の悔い改めのしるしと言っても良いかと思います。間違った宣教ではないでしょう。しかし、それはこの時代の産物であったかも知れないと思います。事実、ヨハネ自身はまだ先を見ているのです。他の箇所で、‟わたしの後に来る者は、わたしよりすぐれた者で、わたしはその方の履物の紐を解く値打ちもない”（3章）と言ってます。

［3］　祝宴と、最上の着物を着せて下さる方

それに対して、主イエス・キリストは、人を様々な縛りから解き放ったのです。もう一度お読みします。「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。」―新しい時代の到来です。有り得ないこと、しかし古から、神の国がやって来る時に起こる神のわざが、今ここで繰り広げられている。そして、それは言葉を超えた奇跡、イエスという存在が、神の国そのものとなっている！ということでしょう。これは真剣な宗教家・バプテスマのヨハネがもたらすことが出来なかったことです。面白いのは、人々の反応です。33節以下。「洗礼者ヨハネが来て、パンも食べずぶどう酒も飲まずにいると、あなたがたは、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。―人々はどちらに対しても文句を言っています。ヨハネの方は余りに禁欲的で、悪い霊に取り付かれているかのようだ。方やイエスという者は、様々な人の中に入り、飲食さえ共にしていると。それはとんでない売国奴のような者や罪人らとも見境なく付き合っている、とても宗教家とは言えない不真面目な存在だ、と言っている訳です。しかし、一見イエスを非難しているこの言葉が、“イエスとは誰なのか”を良く語っていると思います。―イエスは、人間を愛するのです！人間の悲しみを共有し、孤独の中にいる者の中に自ら歩みを進め、楽しく食事をするお方です！このようなことが、どれだけ人に生きる希望を与えたことでしょう。「私は神様に見捨てられていない！」という思いを与えたことでしょう。そしてその究極が十字架だと思います。ヨハネは悔い改めを語るまでしか出来ませんでした。しかし、イエスは、本当には悔い改めなど出来ない罪深い私たちのために、身代りとなって神の裁きを身に引き受けて下さったのです。これが「神様の愛」なのです。単なる裁きでは人間は変わりません。人間を変えるのは、上からの愛です。無条件の「赦し」です！このイエスに結びつく時、神の国の一員とされ、あのヨハネ以上の者とさえ見なされると言うのです。どういうことか。

聖書はこの「救い」や「赦し」のことを、「義の衣を着る」とも語っています。神様がボロボロの私たちに神様の晴れ着を着せて下さるのです。暗い顔をするのではなく、救いの喜びを味わいながら晴れ晴れと生きていきなさい！と私たちの背中を押して下さるのです。それが、逆説的に語られているのが、今日の箇所の中にある、子供たちの遊び歌として引用されている「笛を吹いたのに踊ってくれなかった（笛吹けど踊らず）」（32節）という言葉だと思います。イエス様は、私たちに喜びを与えたいんです。踊る思いで生きて欲しいと願っておられるんです。

私は思い起こしました。あの放蕩息子の譬え（ルカ15章）で、あのお父さんはボロボロになっても戻って来た息子に、裁くことは何一つ言わず、動物を屠って祝宴を開き、最上の着物を着せて下さった、とあるじゃないですか！これが、イエス・キリストの神です。私は思うのですが、このお父さんはこの子のために、着物をずっと用意していて、必ず着せる日が来ることを信じていたのではないでしょうか。信じていたのは、このお父さんの方なんです！子どもは親の心知らずの自我の塊でも。罪人が滅びることを主は望まれないのです。いつまでも待つ。いや、ご自分の方から見出し、走り寄る。これが十字架のイエス様です。そして、復活の喜びの衣です。私たちは、ヨハネの時代の中にではなく、イエスの福音の時代の中に生きています。生かされています。心に晴れ着を着せて頂き、御名を讃美しながら生きていきましょう！お祈り致します。

イエス・キリストの父なる神様、あなたのご愛は、計り知ることが出来ません。

あなたは私たちの心を救いの喜びに満たし、あなたの光の中に歩ませて下さり、私たちに晴れ着を着せ、踊らせて下さいます。感謝致します。イエス様、今日も私たちをとらえて下さい。十字架と復活の主の御名によって祈ります。アーメン。